

「君が世界に嘘をついても。」

天堂まや

## 舞台設定

---

### \*TK電力株式会社\*

一ノ瀬（いちのせ）営業所

従業員数約100人

#### [業務内容]

#### 配線課設備設計部（才賀が所属する部署）

+電気を送る設備を設計するところ。

+一般には、電柱を立てる場所を決めたり、張る電線の種類を決めたりする。

#### 配線課設備保安部

+既にある設備を維持管理するところ。

+台風など、非常災害時に、復旧作業の指令を出す場所でもある。

#### 配線課技術部

+配線課の中でも、唯一の実働部隊。

+常時担当エリアを巡回し、「設備保安部」の指令により、現場へ急行する。

（電気が点かない、容量を変えたいetc）

#### 営業課

+電気の契約に関するあらゆることを担当。

+また広報も兼任している。

#### 料金課

+電気料金の計算、未払いに対する処置を講じる部門。

☆TK電力株式会社会社の中では、市外地を担当する営業所。

☆業務内容は、高圧以下の電気を売るために関わる業務全般。

★架空の電力会社です★

\*県立江洲（えす）工業高校\*

電子工学科（3クラス×3年）

機械科（3クラス×3年）

建築科（2クラス×3年）

☆県の中でも、郊外にある工業高校。

☆成績は、工業高校の中では中の上。

☆各学年、女生徒は3～6人程度しかいない。

\*本好横丁\*

☆祖父江が「TONO」のHNで個人運営している、「本好きのためのインターネットサイト」。

☆新刊情報、作家別リンク、掲示板が充実していて、かなりの大手サイトとなっている。

☆才賀、愛由ともに、掲示板の常連。

★もちろん架空のサイト(笑)★

# 「君が世界に嘘をついても。」まえがき

---

——≡†≡——

もしも…。

君が世界に全てに嘘をついているのだとしても。

それがどんな罪でも構わない。

君が君である限り、

-----ぼくは君が好きだよ。

——≡†≡——

>>>ナリは大きくても悩みの尽き  
ない主人公（攻）

## 才賀 正栄

さいが まさえ

所属&肩書き

T K電力会社株式会社・一ノ瀬営業所勤務。配線課設備設計担当。

入社9年目。27歳

高卒就職組。江洲工高電子工学科卒業。

性格

真面目で融通が利かない、不器用、頑固、身内に甘い。  
おっちょこちょい。

年齢よりも老成した考え方をする。

服装にもあまり構わない。＜妹によく叱られている

趣味

インドア派、読書、ドライブ、最近はインターネット

HN

サイ（名前から安直に）

178cm

外見

細身だがスーツも作業服も似合う、肩幅のあるタイプ

黒髪・少し癖毛

ハンサムというほどでもないが、十人並み。少し目付きが悪いが、笑うと愛敬がある。

家族構成

両親、妹夫婦、犬

両親と一戸建てに住んでいたが、妹夫婦が同居するのを機に家を出た。

住居

（家族仲はいいが、義弟を気遣って）

実家近くのアパートに一人暮らし。家事能力がまったくないので、妹が時々やってくる

>>>ナリは小さくても愛は大きい  
主人公（受）

## 来海 愛由

るみ あゆ

所属&肩書き

江洲工業高校2年生。電子工学科在籍。  
部活は、電子工学研究部所属。（電工研）  
※教師の雑用係のようなもの(笑)。

性格

なににでも興味を持つ。  
明るく素直。  
割合、なんでも器用にこなす。

趣味

読書、インターネット、  
ゲームセンター  
（ただし、家でやるようなゲームは好きではない）、  
バスケット（ただし本格的にやっているわけではない）

HN

鮎（本名が女の子のようなので、字面を変えたかった）

外見

163cm  
痩せ型  
栗髪・ストレート（雀の尻尾のようにゴムで括っている）  
ガクラン  
童顔でかわいい顔立ち

家族構成

両親、姉、兄、祖父母、犬。割と裕福な家庭。

住居

大きな一戸建てに家族と住んでいる。

>>>才賀の旧友

## 祖父江

／そぶえ

所属&肩書き

江洲工業高校電子工学科教師。  
愛由、切手の担任。  
母校を卒業してそのまま母校に「助手」として就職。  
夜間大学を卒業し教免を取り、正式採用された。  
陸上部顧問。ただし、パソコン好きなので、よく電工研にも顔を出す。  
才賀の高校での同級生。27歳。

	インターネットサイト「本好横丁」主催者。 明るくおおざっぱ。
性格	生徒には兄貴肌で慕われる。 ただし、仕事（レポート提出など）には厳しい
趣味	読書、インターネット、パソコン全般、陸上（学生時代は砲丸の選手）
HN	TONO（バカ殿というイメージで、本人がシャレで付けた）
	182cm
外見	太くはないが筋肉質型 黒髪・スポーツ刈 眉が太いが強面ではない

>>>愛由の親友

## 切手 / き

って

	江洲工業高校電子工学課在籍。二年生。
所属&肩書き	愛由の同級生。一年生の時に名前順の席で親しくなった。 陸上部所属だが、気が向いたときにしか行かない。（プリンター） 明るくちょっと軽目。 しかし、相手が真剣なら真剣になってくれる。
性格	愛由と才賀の仲は知っている。 （ただしインターネットはやっていないので、掲示板などでのふたりの様子は知らない）
趣味	ゲーム全般、（TVゲーム、アーケードゲームを問わない） 最近の得意はDDR、 パソコンは授業でやる程度
外見	171cm 愛由よりちょっと肉付きが良い程度。華奢ではないが細い。

# 「君が世界に嘘をついても。」

Series #1 「灯（あかり）」

紺を基調にしたツートンの作業服からカジュアルな私服に着替えた才賀正栄（さいが まさえ）は、配線課ブロックの灯かりを全て消した。

鉄筋2階建の事務所の一階には、才賀たちの所属する配線課と、営業窓口が置かれている。日中は約六十名が行き来するこのフロアも、定時を3時間も過ぎた今では、才賀と当直者の気配しかない。

才賀は、唯一灯かりが残るフロアの奥へ声を掛けた。配線課の一角に設けられたスペースは、当直指令者の定位置である。

TK電力株式会社では、事業所や業務の内容によって体制は異なるものの、常に当直者が就くことになっている。発電所などは24時間体制で稼働しているし、一般の営業所でも有事に備えて最低の人数を配備しているのだ。

ちなみに一ノ瀬営業所では、電話を受けたり無線指令をする指令者と、実際に現場へ向かう技術者の、ふたり一組が基本となっている。

「じゃあ、帰るわ。お疲れさん」

「お疲れさんでした。才賀さん、車でしょ？ 気を付けて帰ってくださいね」  
二つばかり入社が下になる後輩に劳われて、才賀は普段吊り上り気味の眦を下げた。途端に愛敬のある顔になる。

「そっちも今夜は静かだといいな」

「言わないでくださいよ。口にすると、出るって昔から言うじゃないですか」

オンライン端末のCRTと業務用無線に囲まれたブースに居る今夜の指令者は、酷く嫌そうな顔をした。人気のないフロアで、CRTの灯かりだけが妙に浩々と点いていた。

「それでなくても、今夜は『出る』って噂の班長と一緒になんですよう」

「折損なんかは人に付くって言うからなあ…」

不安を煽るような一言に、後輩は情けない声を上げた。折損というのは、[車がぶつかって電柱が折れる]ことを指し、起きて欲しくない事故のトップクラスにランクインする。

「才賀さん、だから言うの止めてくださいよォ」

「ま、がんばれよ」

恨みがましい視線を軽く流すと、相手も応酬してきた。

「…出たら真っ先に呼び出し掛けますからね!!」

「おいおい。俺の呼び出し順位、知ってるだろ？」

「金曜の夜に捉まる人間なんて限られてますからねー」

事故が起きた場合、当直の人間だけでは到底対処しきれない。そういう場合は、営業所に近い従業員・若手などが優先的に呼び出しを食らう。病院などのように「待機」という扱いではないため、今日のような月終わりの金曜日には人が集め難いのは確かだった。

「…ちゃんと在宅表見ろよ」

「あれ？ 今夜と明日、×になってる!!」

配線課に在籍する人間の在宅予定表が司令室には掲示してある。効率よく呼び出しを掛けるためだ。

がっくりと項垂れる後輩に、才賀は肩を竦めた。

「悪いな。明日は本当に抜け出せない用事があるんだ」

「いいですよ。どうせデートでしょ？」

凶星を指されて、才賀は視線をさりげなく逸らした。

「ーなんにせよ、出ないのが一番…だな」

「そう願ってますよ」

しみじみと応じた後輩に片手を振り、才賀は別れを告げた。これ以上ここに居たら、墓穴を掘りそうだったからだ。

「おやすみなさい」

殊勝な言葉に送られて、事務所を出る。

三月も下旬に入ったが、暦上は春でも、実際にはまだまだ冷える。

駐車場までの僅かな距離、才賀は薄手のコートの前をしっかりと留めた。

定時は17時半なのだが、愛車に乗り込む頃には既に22時近くなっていた。年度末を控え、仕事量が増えているのだ。月末までは、まだしばらく残業が続くだろう。

才賀が所属している「配線設計課」は、7千ボルト以下の電力設備の設計を業務の主体としている。

大まかに言ってしまうえば、電柱を「どこに建てるか」「どんな長さにするか」、「どんな種類の電線を張るか」を決めて図面を引く仕事である。

だが、この仕事は図面を描くだけがすべてではない。

現場の調査やスケッチ、果てには客や官公庁、業者との折衝もすべてひとりで行う。

時には、電気の知識だけでなく、建築用語や道路図面を見る土木的な専門知識も必要になった。

入社して、この春で9年目を迎える。それまでに、幾度も失敗をしたし、挫折を感

じたこともある。

仕事を辞めようと思ったことも、実を言えば一度や二度ではない。

それでもなんとかここまで続けてきたのは、昨今の失業率や経済状況を鑑みたわけではなく、多少なりとも、この仕事にやりがいを感じているからだ。

電柱などの設備は、何十年もその場に残る。

新入社員の頃に苦勞して設計した柱が、現在も同じ場所に建ち、周囲に電気を送っているのを見ると、この仕事をしていてよかったと思ってしまうのだ。

その話を、携帯電話のメッセージの中で恋人にした時、彼は電話回線の向こうで微笑ったようだ。

>じゃあ、俺が才賀さんとうこうして繋がってられるのも、才賀さんが設計した電柱のお陰かもしれないね

送り返されてきたメッセージに、愛由らしい優しさを感じる。

インターネットを通じて知り合った、年下の恋人。

現役高校生の彼とは10歳ほど年齢が離れているのだが、歳の差を気にしたことは殆どなかった。

才賀が上下関係を鼻にかけないフランクさを持っているのもあるし、なにより、来海愛由（くるみ あゆ）自身が歳よりも大人びた考え方をする少年だったからだ。

少し背伸びをしがちな気がしないでもなかったが、才賀は愛由のそういう部分でさえ愛しいと思っていた。

平均をやや上回る身長と、そこそこの外見。その上勤め先は一部上場している一流企業である。才賀はもてない方ではなかったが、これまで忙しさを理由に恋人らしい相手を作ったことがあまりなかった。

たまに、人からの紹介や相手からの告白をきっかけに付き合うのだが、長続きした試しがない。あくまでも仕事を優先する男に、女性の方から見切りを付けられてしまうのだ。

愛由とは、「恋人」として付き合い出してようやく半年が経ったところだ。それでも、歴代の恋人の中ではダントツを誇る長い付き合いである。

残業・休日出勤が続く才賀と、バイトと部活を両立させている愛由とは中々時間が合わない。せいぜい、仮想電子世界でほんの少しの会話を交わす程度だ。だが、愛由はそのことに対して不満を申し立てたことはなかった。むしろ、日付変更線を越えてから帰宅しても、携帯電話からちまちまとメールを送くる才賀に、気遣わしげな返事を返してることが多かった。

>才賀さん、無理してメール送ってこなくていいよ？

才賀を待って健気に毎晩遅い時間まで携帯電話を握りしめているくせに、そんなこ

とを書いて寄越してくるのだ。

相手を思い遣る…些細なことかもしれないが、その優しさが、人と人との軋轢に疲れた才賀を癒してくれる。

>俺が、愛由と話してたいんだよ…。

愛由と話していると、元気が沸くから。

お世辞でもなんでもなく、それは才賀の本心だった。

年上の男としては情けないかもしれないが、愛由に少しばかりの愚痴を吐き出し、癒してもらうことで次の日の活力になるのだ。

反対に、愛由の学校やバイト先、進路についての相談に乗ることもある。その内容が真剣なものであれば、翌日が平日で仕事があっても、才賀は根気よく付き合っていた。

忌憚なく話せて、そして支え合うことの出来る関係。才賀は、愛由とのこの関係をととても大切にしていた。

明日は、その愛由との久々のオフ・デートである。

しかも既に春休みに入って居るため、両親からは外泊の許可も得てあるらしい。

いつもは電子世界か、よくて電話でしか会えないが、明日と明後日は久しぶりに本物の愛由に逢うことが出来るのだ。

…早く逢いたいよ、愛由。

そして、機械を通してのメッセージなどではなく、直に愛しさを伝えたい。

話したいことも、したいことも沢山あった。

愛車を自分のアパートまで走らせながら、思うのはただそのことばかりである。

いつもなら、見たくなくても目に入ってくる電柱などの様子も、今日ばかりは才賀の瞳には映らなかった。

普通にデートしていても電柱や電線の様子ばかりを気にする才賀の職業病を知っているかつての恋人たちが、今の彼を見たら、かなり驚き…そして呆れるだろう。

…私と付き合っているときに、そんな顔をして欲しかったわ、と。

それほどまでに、才賀は楽しそうな顔で愛車を運転していたのだった。

# Session

>> 君が世界に嘘をついても >>

愛由は隣を歩く青年を見上げた。

「才賀さん、ちょっと聞いてもいい？」

「いいよ」

二つ返事で応じると才賀は恋人である少年に腕を引かれて、人垣に並んだ。

まだ寒い2月とはいえ、週末の夜のこと。

総合乗換駅である金山は、老若男女を問わず沢山の人で溢れ返っていた。

その中でも、特に人が集まっている一角があった。

既に店仕舞いをした旅行会社が、通路を挟んで対角線上にふたつある。その前に、同じような規模の人だかりが出来ていたのだ。

厚い壁になっていて、中心の様子は見えない。だが、聞こえてくるメロディから、どちらも路上ライブをしているのだと知れた。

路上活動からメジャー・デビューしてブレイクした二人組の影響か、昨今、どこの駅前でもアマチュア音楽家の活動が目覚ましい。地面や階段などところ構わず座り込んで、ギターなどの楽器を掻き鳴らし、熱く歌っている。

才賀は普段車通勤なので、今夜のように交通機関を利用することは滅多にない。

だから、噂に聞く路上ライブがこれほど騒々しいものだとは知らなかった。

とにかくあちこちで似たような曲が、稚拙な演奏によって聞こえてくるのである。

出来れば足早に通り抜けてしまいたかったが、久しぶりのデートにはしゃぐ恋人のおねだりには勝てなかった。

電力会社に勤務する才賀と、現役高校生の愛由では生活時間がまったく異なる。

特に、才賀は残業と休日出勤、果てには当直に追われる身である。高校生の愛由に合わせた逢瀬の時間は、なかなか取れなかった。一週間に一度、会えれば良い方なのである。

しかも、この恋人、滅多なことではわがままを言わない。逆に身体を気遣われることもあるくらいだ。

才賀としては、愛由の我侷ならどんなささいなことでも、大それたことでも叶えてやりたかった。

「ちょうど新しい曲が始まったみたい」

嬉しそうに、愛由は才賀のコートの袖を引いた。

促されて耳を傾ければ、人垣の中心から、若い男性の声が聞こえてきた。

若いのが、少年独特の不安定な歌声ではない。もう少し深みのある、低音だ。大学生くらいだろうか。

そこに巧みなギターが重なった。

「…へえ」

確りした指使いから奏でられるギターに、才賀はつい感心したような声を漏らした。

「ね？ 巧いでしょ？」

我がことのように嬉しそうな愛由に、才賀は頷く。

「これは巧いな」

おだてではない。才賀は音楽に関しては門外漢だが、その彼にもわかるほど、この演奏者の腕は良かった。

難しい曲を難しく弾くのは、それほど困難ではないとギターが趣味の友人に聞いたことがある。

だが、難しい曲を、さも容易なように見せかけて弾きこなすのは、相当の努力と才能が要るらしい、とも。

演奏されているのは、梶原凧人のバラードのナンバーだ。アルバムからシングルカットされたこの曲は、耳に馴染みやすく、ヒットチャートではそれほど高い位置にいないわけではないが、ロングセラーを記録している。

しかし、聞くのと弾くのとではまったく異なる。

件の友人から、この曲の困難さを聞き及んでいた才賀は、青年が並みの技量ではないと推し量った。

まるで困難さを感じさせないすべらかな演奏に、恋人と共に聞き惚れる。

その時、背後からギターの音が飛び込んできた。

周囲で奏でられている、騒音のような拙いギターとは違う。

例えて言うならば、この人垣の中心にいる青年と同じほどの実力を持った音だった。

振り返れば、さきほど見かけたもうひとつの人垣から音楽は聞こえてきた。どうやら、あちらでも路上ライブが行われていたらしい。

「あっちの人は初めて聞くよ。巧いね」

愛由も同じように振り返って、今しがた聞こえてきた演奏に関心を寄せた。

ギターの伴奏に合わせて届く声は、いささか幼い印象がある。大学生、ということないだろう。おそらくは、愛由と同じくらいの年ではないだろうか。

青年のギターに対して負けずとも劣らずの技巧を持つ少年は、歌声でも引けを取らなかった。伸びやかな声が、梶原凧人の代表的なナンバーを歌い上げる。

「実力伯仲というわけか」

人垣の多さはどちらも同じようなものだ。それはふたりの実力が拮抗している証だろう。

相変わらず構内では、調子外れの演奏や歌声が聞こえてくる。

騒音に耐えかねたように、足早に共通通路を通り抜けていこうとする人も多かった。

だが、多少でも聞く耳を持ったものは、ふと足を止める。そして時間のあるものは、大概、青年か少年、どちらかを囲う人垣の輪に加わった。

マイクやスピーカーを使っているわけではない。だが、騒音の中でも不思議とよく通る歌声が、人々の足を止めさせるのだ。

その時の気分で、青年か少年の歌声を聞きながら、才賀はあることに気付いた。

路上に陣取る少年少女は、大抵が路上ライブの走りになった二人組のコピーをしたがる。元がギターで作曲してあるが故に、演奏しやすいのだろう。

だが、才賀が今聞いている青年と少年が奏でるのは、梶原凧人の曲。

梶原はギターを弾くこともあるが、バンドを従えての楽曲が圧倒的に多い。

従って、彼らが今奏でている曲も、本来は複数の楽器で演じられるているのだ。ギター用のアレンジはしてあるようだが、その分技巧的にはかなり難度が高くなっているようだ。

クラブハウスへ行けば、梶原のコピーバンドは沢山居るだろうが、生憎ここにはギターでその難曲を弾きこなせる腕を持つものは彼らを除いて他には居ない。

青年と少年は、演奏順は違うが、ふたりとも同じような選曲をしていた。梶原凧人の曲が多いが、たまに洋楽や、他の邦楽も混ざる。曲の難度で選んでいるのかとも思ったのだが、どうにも違うらしい。時には単調なメロディも演奏して見せるからだ。彼らは純粋に、ただ自分の好きなものを弾いているだけなのだろう。

世界的にそして歴史的に有名なバンドの名曲と、梶原。続けて2曲バラードを歌った青年は、次の曲を決めあぐねたように、弦を爪弾いた。

「次は何かな」

同時に口に出してしまい、愛由と二人、顔を見合わせて小さく笑う。

性格も嗜好も異なるはずなのに、なぜかちょっとした台詞が重なることがある。別々に過ごしてきた日々ではなく、重ねた日々が二人を近づけるのだろうか。

二人がもう一度同じ言葉を口にしようとしたとき、人垣の向こうからギターの音が聞こえ始めた。青年が次の曲の演奏を始めたらしい。今までのバラードとは打って変わった、ノリのいい曲である。

その音を追うようにして、才賀たちの背後からもメロディが聞こえ始めた。

青年と少年。

二人が同時に、同じ曲を奏で始めたのである。

最初は、青年に対する少年の挑戦かと思った。

至近距離で、自分と同等の実力を持つ人間が、しかも自分と同じような選曲をしているのである。面白くないだろう。

だから、どちらが上なのか、張り合うつもりで少年が同じ曲をぶつけてきたと思ったのだ、誰もが。

だが、観客の思惑は外れた。

青年が主旋律を低く歌えば、少年は彼特有の高く澄んだ声で主旋律を重ねてきたのだ。

ギターも、同じ旋律を弾きながら、微妙にアレンジが変えてあるらしい。1本では表現の難しい音も、重ねることで厚みが出る。ピアノでいう連弾に近いかもしれない。

難所と呼ばれる鏑の部分も、二人は互いのリズムを崩すことなく、なんなく合わせあう。

既に、これは「二人」の音楽ではなかった。「1つ」の音楽が、そこにはあった。

ノリのいい曲なのに、観客たちは物音一つ立てず、聞き入っている。

一瞬の芸術だと、きっと誰もが肌で感じていたのだろう。

青年の技巧を駆使したギターに、少年のまだ少し固さの残るギターが挑戦するかのように掻き鳴らされ、ふたりは同時にピックを引き下ろした。

最後まで息のあった演奏に、才賀はもちろんのこと周囲の観客たちは余韻を楽しみ、そして弦の音が消えるとすかさず拍手でもって彼らを讃えた。

人垣で演奏者の様子は見えなかったが、再び弦を爪弾く音は聞こえてきた。

才賀も愛由も、またしてもふたりの息の合った演奏を聴けるのかと期待する。しかし、本人はさきほどまでの興奮をすでに忘れたかのように、前と同じように各々が好きな曲を弾き始めた。

観客たちはがっかりしたが、執拗に二人に請うこともしなかった。

誰かがなにかをリクエストし、青年は気安く請け負った。

止まっていた時間が動き出すように、駅に喧騒が戻ってくる。

途端に寒さを思い出して、才賀は自分のマフラーを外すと、愛由に巻いてやる。

「寒くないか？」

「ううん、全然」

「そっか」

「才賀さんは？」

「俺はこれがあるから大丈夫」

才賀が愛由の目の前に出したのは、今日愛由が贈ったばかりの手袋だった。仕事柄外に出ることが多いと聞いたので、小遣いをはたいて買ったのだ。バイトもしていない身では、高価なものなど買えるはずがない。だが、シンプルな黒い合皮の手袋を、才賀はとても喜んでくれた。今まで着けていたものがあったのに、その場で着け替えてくれたほどだ。

その優しさが、愛由には嬉しい。

滅多に会えないことは寂しいが、会えたときには才賀はそれまでの分を埋めるかのように心を砕いてくれる。平日は残業で疲れているだろうに、毎晩チャットに付き合ってもくれる。こうして、名もない青年たちの、路上ライブにも付き合ってくれる。

物を貰ったり、食事を奢って貰うより、愛由にはそれが嬉しかった。

可愛い外見に似合うキャラメル色のダッフルコートに身を包んだ愛由は、こっそり才賀の腕に頬を寄せる。

才賀は気付いたが、突き放すことなく、少年の好きにさせた。愛由が人前で甘えてくることは珍しい。なにより、年甲斐もなくそれが嬉しかったのだ。

「もうちょっと聞いていい？」

「愛由が空腹を我慢できるまでならいいよ」

「もう！」

ぷくりと少年が膨れて、才賀の腕をぱしんと打った。力が入っていないので当然痛くないが、才賀は賢く「降参、降参」と負けてやった。

カシミアが混ざった黒のロングコートは肌触りがいい。愛由は先程のように頬を寄せると、小さく呟いた。

「さっきの凄かったね」

「そうだな」

「また聞けるといいね」

「もし、あいつらがデビューすることがあったら、聞きに行こう」

「約束だよ？」

「もちろん」

この時、才賀も愛由も、二人がデビューすることは疑っていなかった。

だが、それはソロもしくはバンドとしてという形式だと信じて疑わなかったのである。

ギターを抱えた二人組のライブに、二人が出かけていくのはこれから1年三ヵ月後のことである。

のちにこの日のセッションが、「伝説の」という形容詞がついて語られることを、才賀たちはまだ知らない。

+